



Data

監督・脚本: ピーター・ヘッジズ
出演: ジュリア・ロバーツ/ルーカス・ヘッジズ/キャスリン・ニュートン/コートニー・B・ヴァンス

■■■ショートコメント■■■

◆4月には俳優ピエール・瀧が大塚取締法違反で逮捕されたニュースで日本中が沸き返った。そのため彼が出演していた『麻雀放浪記 2020』は予定どおり上映したものの、『居眠り磐音』は彼の代役に奥田瑛二を起用し出演箇所を再撮影して差し替えた。更に、5月にはアイドルグループ「KAT-TUN」元メンバーの田口淳之介と元女優の小嶺麗奈が逮捕された。私には関係ないことだがこのように今ドキ日本はバカばかり。そう思っていたが、何の何のアメリカはもっと深刻らしい。ニコール・キッドマンが母親役を演じた『ビューティフル・ボーイ』はそんなテーマの映画だったので、つまらないと思ってパスしたが、同じようなテーマでジュリア・ロバーツが母親役を演じた本作は時間の都合がうまく合ったので、一応鑑賞しておくことに。

◆本作冒頭は、いきなり19歳のベン（ルーカス・ヘッジズ）が実家の玄関をたたきシーンから。その日はクリスマスイブ。どうやら、ベンは治療施設を抜け出して実家に戻って来たらしい。しかし、家族は総出しているらしく、あいにく家の中に入れなかったから、ベンは家の外でじっと座って待っていたらしい。そこにクリスマスの買い物に出かけていた家族が戻ってくると、母親のホリー（ジュリア・ロバーツ）はすぐに車を降りてベンを抱きしめたが、妹のアイヴィー（キャスリン・ニュートン）や継父ニール（コートニー・B・ヴァンス）たちは・・・？そこから延々と薬物依存症から逃れることがいかに大変かについての、母親と息子のお涙頂戴の物語になっていく。しかし、それを見ている私はイライラするばかりで、全く同感できない。

◆途中からホリーとニールが互いに子連れ再婚同士であることがわかるから、ベンへの接し方がホリーとニールで大きく違う意味がよくわかる。しかし、基本的に私にはベンに対するホリーの対応は納得できないものばかりだ。とりわけ、ベンを伴ってクリスマスイブのイベントに出かけた後に何者かが家に押し入り、愛犬を連れ去った事件の処理を巡っ

てはホリーやベンたちの行動は全く納得できない。しかも、その行動はホリーとニールとの間でも、母と娘の間でも嘘の情報を提供し合いながらの展開になるから、なおさらだ。チラシには「救えるとしたら、私しかいない」と書かれているが、そもそもそれが間違っているのでは・・・？

◆てわなけで、チラシに書かれている「10分毎に予想外の展開」がつまらなければ、「ラストに待ち受ける衝撃の運命とは？」もありきたり。これで本作「圧倒的な存在感を放つロバーツ。まさにキャリアの頂点」だとしたら、『エリン・ブロボッチ』（『シネマ1』36頁）で素晴らしい演技を見せたジュリア・ロバーツも落ちぶれたものだ。

2019（令和元）年6月11日記